

『文学と哲学と歴史』

LIBRARY ICHIKO 156 AUTUMN 2022 10月31日 発売予定

知的拘束の総和を定めるイデオロジックは、作者の知的資本と作品の知的資本とに分解される。間を情緒資本が適及的な意味作用として働かせる。これらは語りと言表化された文を構成し、実際行為として指示される。出来事と実際行為の拘束的論理には解釈システムが潜んでいる。ゆえ、相対的に決定論的であるが、絶対的に実存的情緒（存在関係と相見する）の生の仕方になっている。そこで言説は換喩や沈黙として迂回するのだが、論理的拘束性と非決定的な実際行為とが供する可能性の方向性やリズムが意味構成されることにおいてである。従って、批評観察は適及的な真実性と線的な全体性の実現の必然性を確認することしかできない。このとき、プラチック理論の秩序化の論理は、社会的秩序の理論とともに通用しない。ここに文学空間の場所がある。論理的統語法が社会的プラチックと混ざり合う次元から離床しているからだ。意味をなくす意味的作用に働いているシニフィアンである。意味の闘いは、社会的な闘い、歴史との闘いである、その場所に述語表出される空間が文学的空間である。石川淳が拒否したように、歴史小説の通俗歴史観はただの支配従属言説でしかない。

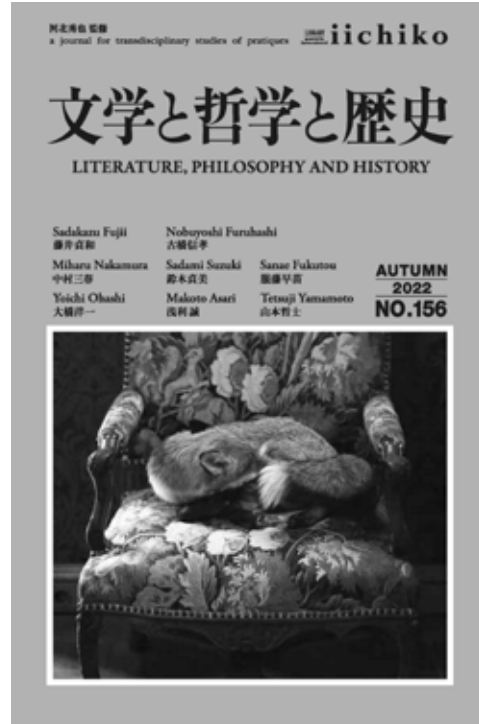
他者に対して測定される同一性は、自らを失う危険を犯してしか構成されない、そこに耐え、受け入れ、分有共有している事実とそれを口にしなから耐え続けている人々の真実は、定式化可能な語りと実行可能な行為の総和の中にパラダイム的な様態において統合化連携に結合されている。

人類学的理論は、物語世界を叙述することにおいて、社会科学的概念空間と文学空間との間での、個人へ収斂された意味と力の総和を、媒介的に明証化している。概念転移は、その場所において可能になるが、構造的人類学や機能主義の人類学の次元を超えているマルク・オジェの人類学理論とポルトゥアンスキーの社会学理論（人類学的考証になっている）との次元水準におけるファンダメンタルな人間観察にあつてのことだ。

ポール・ド・マンがルソーやニーチェを文学批評として論じざるをえなかった根拠の客観化の客観化から文学批評理論は開示されていく契機をもつ。批評理論の知的関係は基本的な社会関係であること、概念空間が、既存批評理論・文学理論とは異なつて構築されねばならないが、社会科学の批判理論や形而上学の哲学理論の転移をもつてである。思考の秩序と生きた秩序とは非分離であり、個人の想像力と社会的象徴性はそこから発しているゆえ、述語表出でしかそれは語られないからである。意味は意味として構成されていないシニフィアンの次元の表出が自己表出である。語とともに開かれ、文とともに閉じられるパワー関係がある。個人は、主体的に主語的実存ではなく、社会エージェントでもなく、客観的生物実在でもなく、世界で唯一の述語的「自分」である。〈物語Ⅱ歴史〉の新たな概念空間がその断裂Ⅱ裂け目を非分離へと構成転移していく。

▼藤井貞和「石、かたち、至近への遠投」▼古橋信孝「文学研究の今」▼中村三春「序説・雑音調文芸学」▼服藤早苗「平安時代の結婚と夫と妻」▼鈴木貞美「なぜ、日本におけるナラトロジーが必要か(4)」▼柳田國男の民俗学、その評価の問題「その2」▼野口武彦「わが名を呼ぶ声」▼浅利誠「述語制言語の日本語とコブラ」【連載8】▼カラー特集「木とともにある暮らし」フィンランドの森と建築」

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二三年一月末発行予定



A5変形 128頁 1650円(本体+税10%)

【監修・アートディレクター】
河北秀也(かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士(やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「RCC」→ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局

tel:03-3580-7784 fax:03-5730-6084

文学と哲学と歴史

LIBRARY ICHIKO 156 AUTUMN 2022 1650円(税込)

部数

貴店名

ISBN 978-4-910131-35-1 C1010 ¥1500E